第2回　植田久男書展

記　録　集

会期：平成17年2月8日（火）～2月13日（日）

会場：水戸市　アートワークスギャラリー

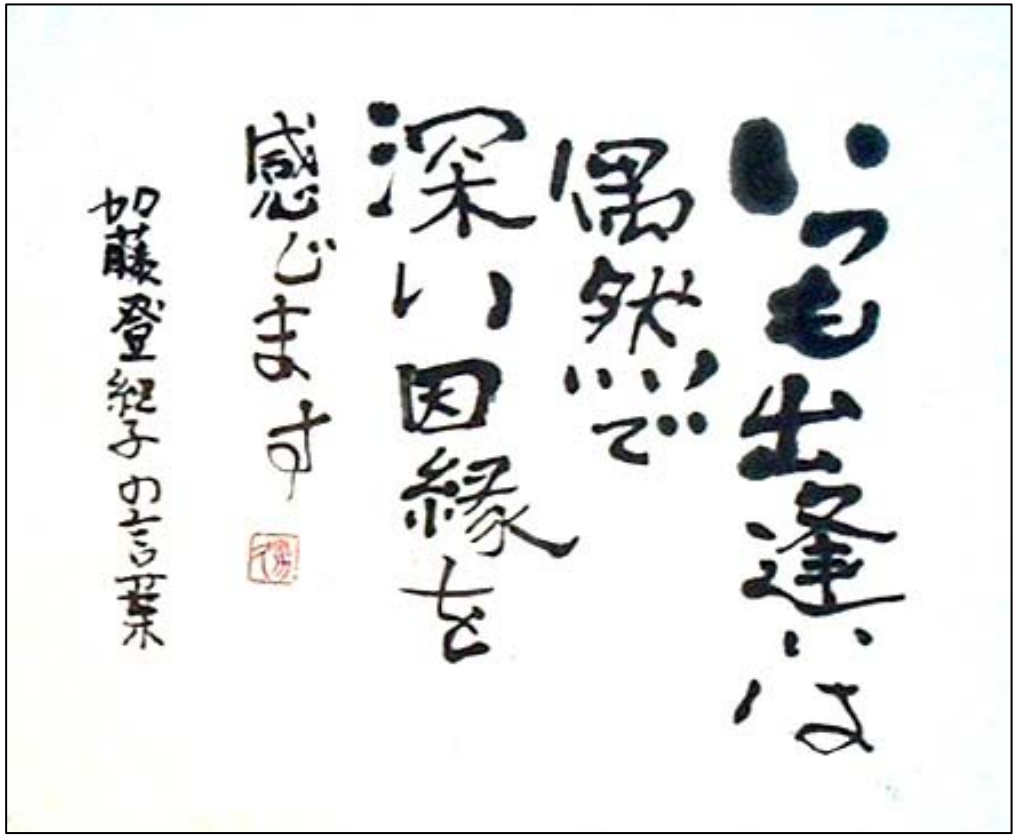
ご来場の皆様へ

このたびは厳寒の中、そしてまた遠路ご来場いただきましたこと心より感謝申し上げます。
第二回の個展開催に際しては、皆様からの温かいご支援や励ましをいただき、なんとか今日にいたりました。ご厚情に見合った成長があったかは、誠に心苦しい限りで、拙い作品ではあります。
前回から約一年半の自分の痕跡として、さまざまな出来事や想いから心に書き留めた詩や文言、語録をいたずら書きのごとく書き記しました。まだまだ浅学で未熟な身ではあります。
ご来場いただきました皆様とささやかながら、この場を借りまして、平素のご無沙汰を詫びつつ、親しく交友の場となりますことを願っております。
諸先生方、ご友人の方々からのご鞭撻を賜り、今後一層自己研鑽に努めてまいります。
どうぞよろしくお願いいたします。

平成十七年二月　　第二回書展開催にて
植田　久男（愚海）
東海村書道連盟所属

加藤登紀子さんの言葉

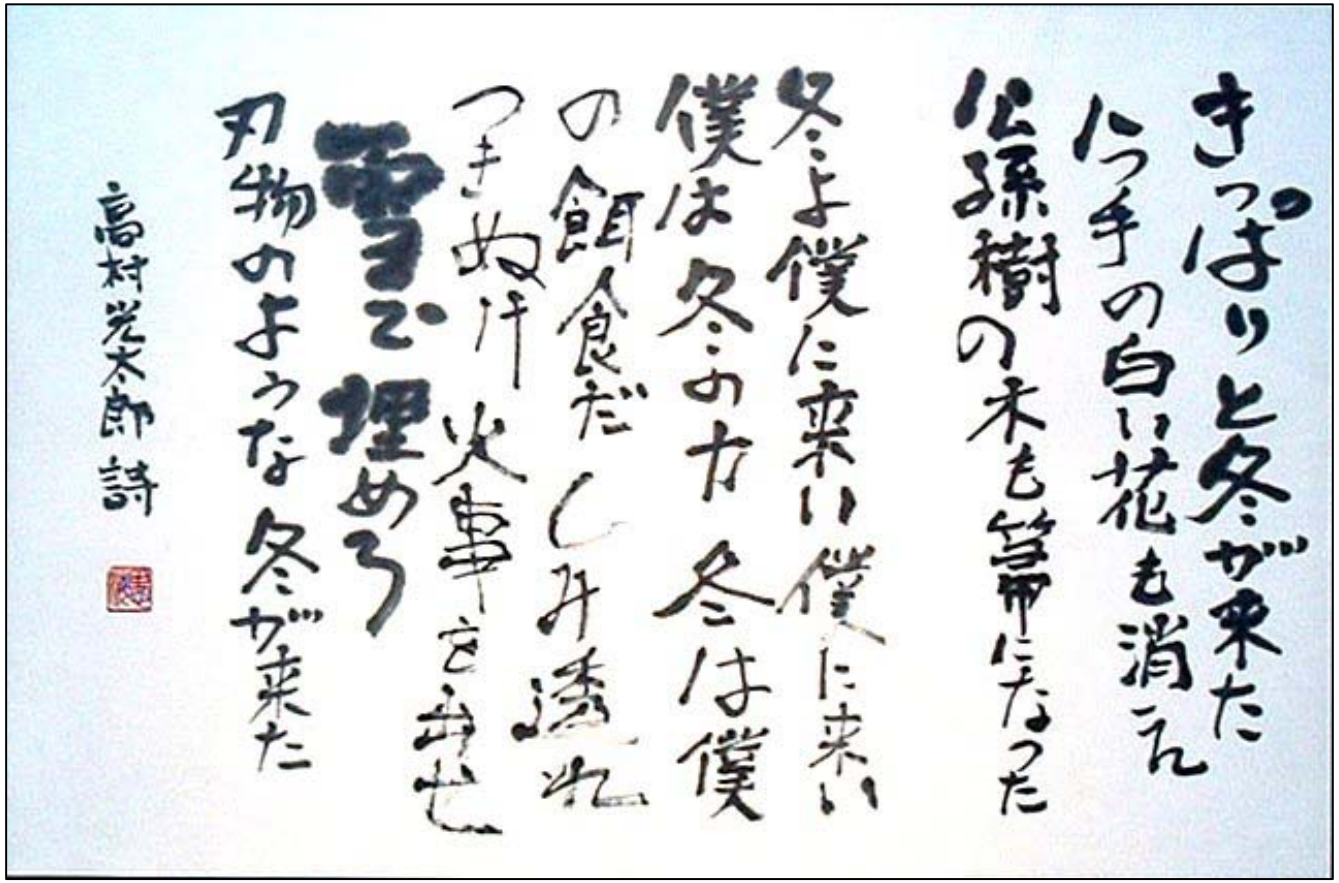
加藤登紀子さんは好きな歌手の一人です。
愛と慈しみを含んだ憂いのある歌声は、深く人生を考えさせてくれます。
歌手としてだけではなく、「旅」「詩」「書」「陶」について著書「わんから」（中央法規出版）に掲載されていました。
旅好きの私にとって旅先での出来事はかけがえのない人生経験です。人との出会いも互いの存在と歳月の流れを再認識させてくれます。今回もささやかながら感動する出会いがありました。



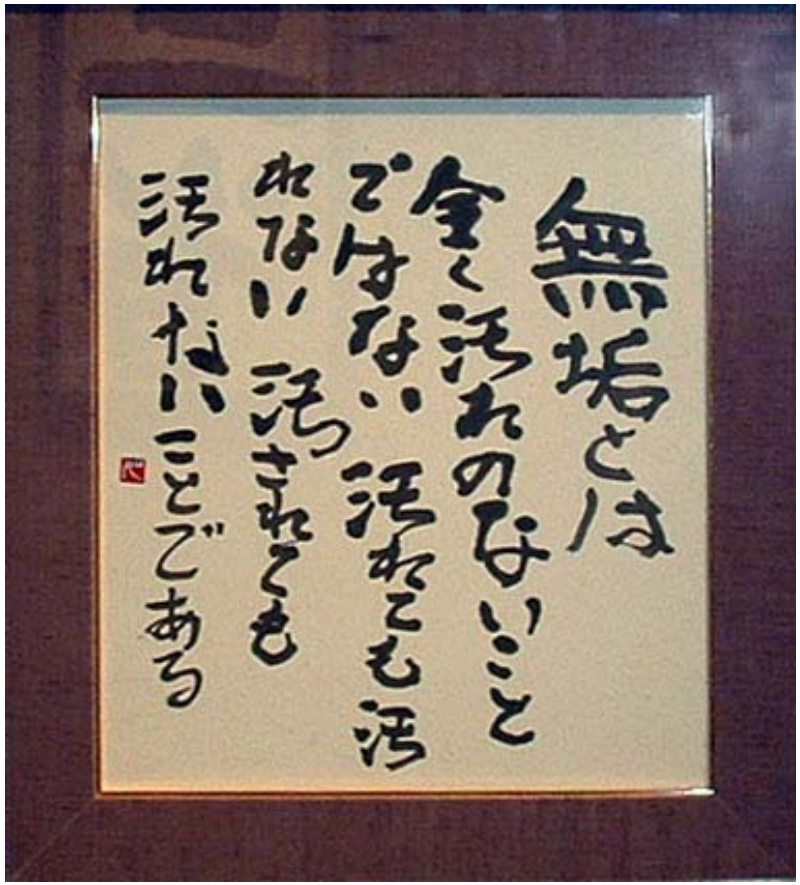
加藤登紀子さんの言葉　（色紙大）

高村　光太郎の詩

今回、冬二月の開催なので「冬の詩」を書きたいと思い選びました。
高村光太郎の詩はたくさんあるのですが、凛として冬の張り詰めた緊張感があってイイナァと感じて書いたものの、イメージだけが先行してしまった嫌いがあります。
線の切れがないと、詩も書作品も活きてこない・・・
さすが高村光太郎の詩は強い。
自分の背筋をピッと伸ばされるような強い信念の鋭さを感じます。
（大学生選で人気ナンバーワンとか・・・）



冬が来た　　（全紙 1/3）



無　垢　　（色紙）

京都駅の構内ポスターで見かけた言葉です。

五輪書　（宮本武蔵）　（色紙）

生きているということ

長野県立こども病院に長期入院しているこどもたちが院内学級で作った文集。わずか十歳前後の子供たちからのメッセージは、一等星以上に輝いています。どの詩も自らの小さな体の中から伝わってくる生命の息吹を率直な言葉でつづられていました。命の灯火は、ローソクのごとく静かに赤々と燃えています。

私はこれまで大過なく、四〇数年生きてきました。健康なときは何ら意識しない「命」ですが、どんなに弱きもの幼きものでもたった一つしか与えられていません。神様から与えられた、たった一つの「命」を大切にすること。そして今、生かされている自分を「どう生きるか」を考えてゆくことも大事です。

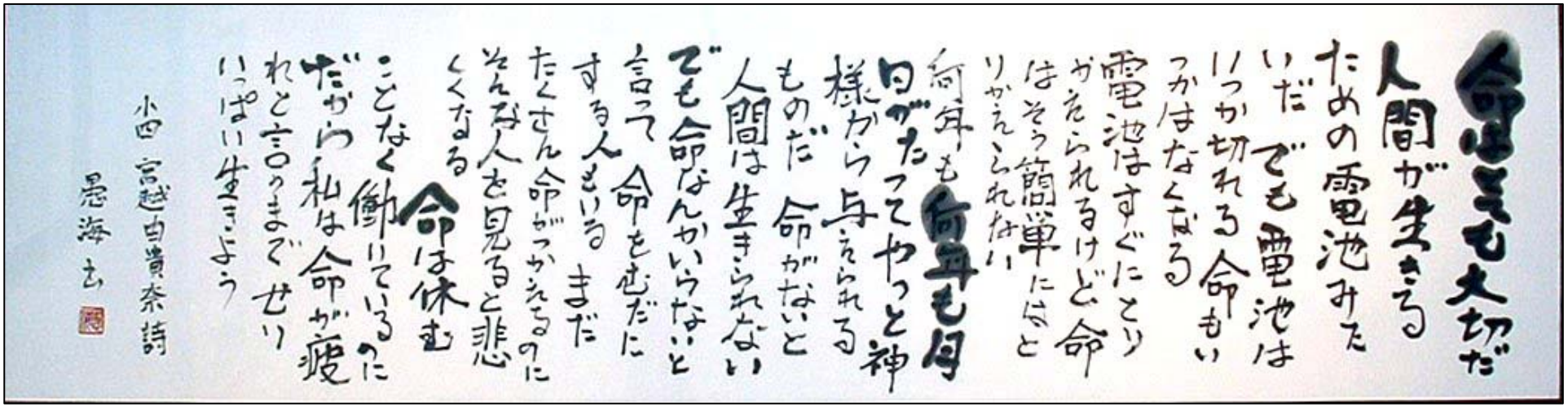
（人生も折り返し点を過ぎましたので・・・）

命

宮越　由貴奈　作　小四

命はとても大切だ
人間が生きるための電池みたいだ
でも電池はいつかなくなる
命もいつかはなくなる
電池はすぐにとりかえられるけど
命はそう簡単にはとりかえられない
何年も何年も
月日がたてやっと
神様から与えられる
ものだ
命がないと人間は生きられない
でも
「命なんかいらない」
と言って
命をむだにする人もいる
まだたくさん命がつかえる
のに
そんな人を見ると悲しくなる
命は休むことなく働いているのに
だから私は命が疲れたと言うまで
せいいっぱい生きよう

出典・森田書店


命ほど大切だ
人間が生きる
ための電池みた
いだ でも電池は
いつか切れる命もい
つかはなくなる
電池はすぐにとり
かえられるけど命
はそう簡単にはと
りかえられない
何年も何年も何
日がたってやっと神
様から与えられる
ものだ 命がないと
人間は生きられない
でも命なんかいらないと
言って 命を捨てだに
する人もいる まだ
たくさん命がつかえるのに
そんな人を見ると悲
しくなる 命は休む
ことなく働いているのに
だから私は命が疲
れて言うのまで せい
いっぱい生きよう
小四 高越白貴奈詩
晃海 玄

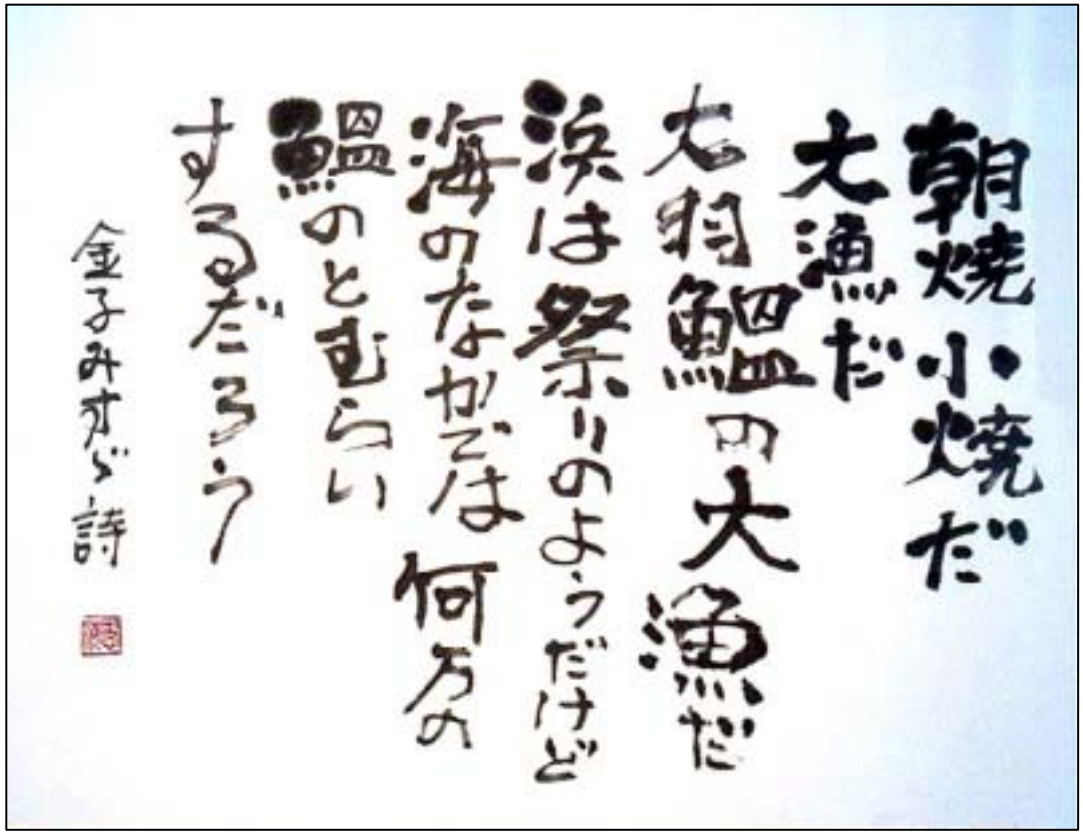
命　　（全紙 1/2）

金子みすずさんのふるさと

一九九四年七月、夜行列車に乗ってみすずさんの故郷、山口県長門市を訪ねた。寝台の中で矢崎節夫氏の「金子みすずの生涯」を読みふけり、あたかも恋人に会いにゆくかのようなワクワクしながらの車中泊。翌朝、美祢線、山陰線と乗り継いで、日本海の小さな漁港町仙崎に到着。

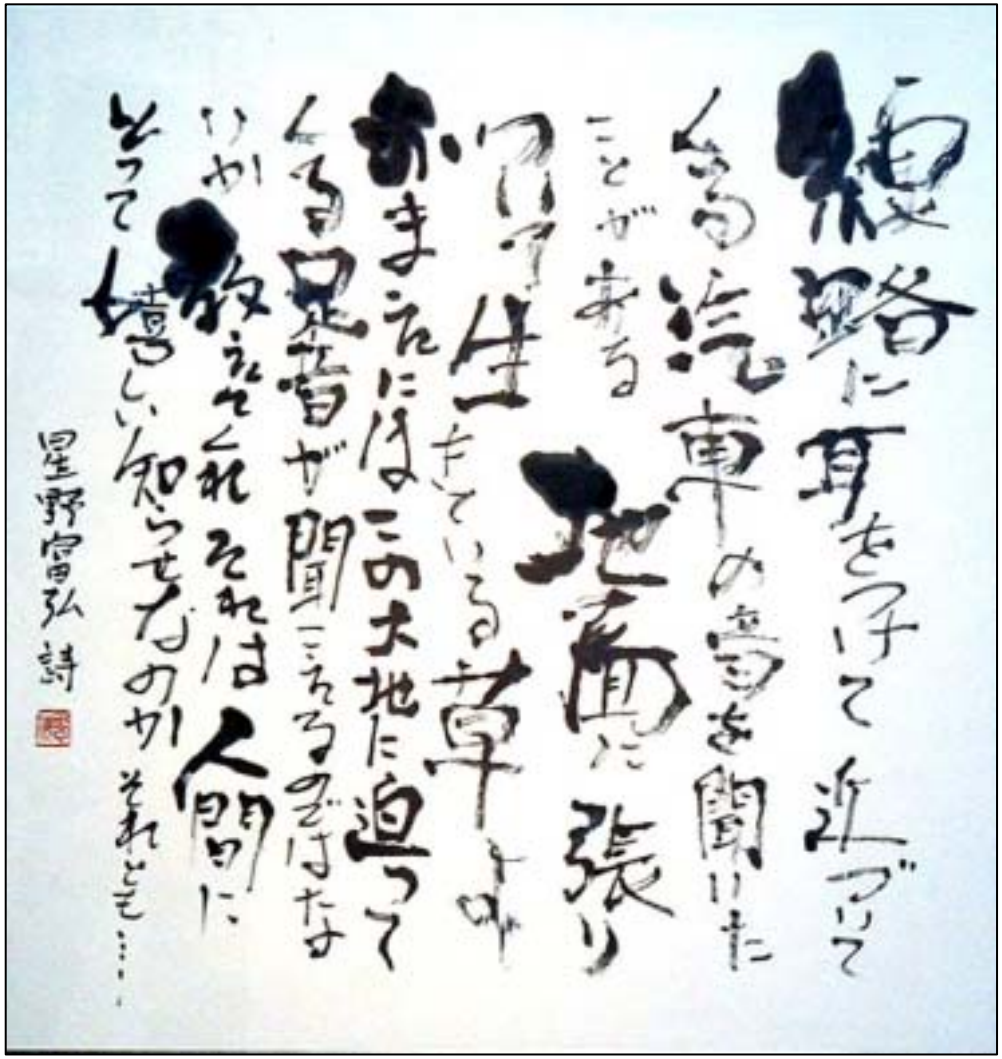
その頃、地元の高校生は白い学生帽をかぶり、母校の伝統なのか乗車してくる上級生に「ォオーッス！」と乗車口に立って挨拶していたことが、なんとも珍しく、ひと昔を想い出させる光景でした。

みすずさんの生きた明治末から昭和初期の面影がまだ残る仙崎の町。小さな路地、静かな佇まい、あいさつを交わしたおばあちゃん、駅まで乗せてくれたおみやげ屋のおじさんなど心温まる、懐かしい町でした。青海島そして透き通るような青い日本海を堪能しました。詩が生まれた故郷を訪ね、風土や暮らしや空気を肌で感じて、改めて作者の心の一片にふれる事ができるようです。



大漁　　（全紙 1/3）

星野　富弘さんの詩



オオバコ　　（全紙 1/2）

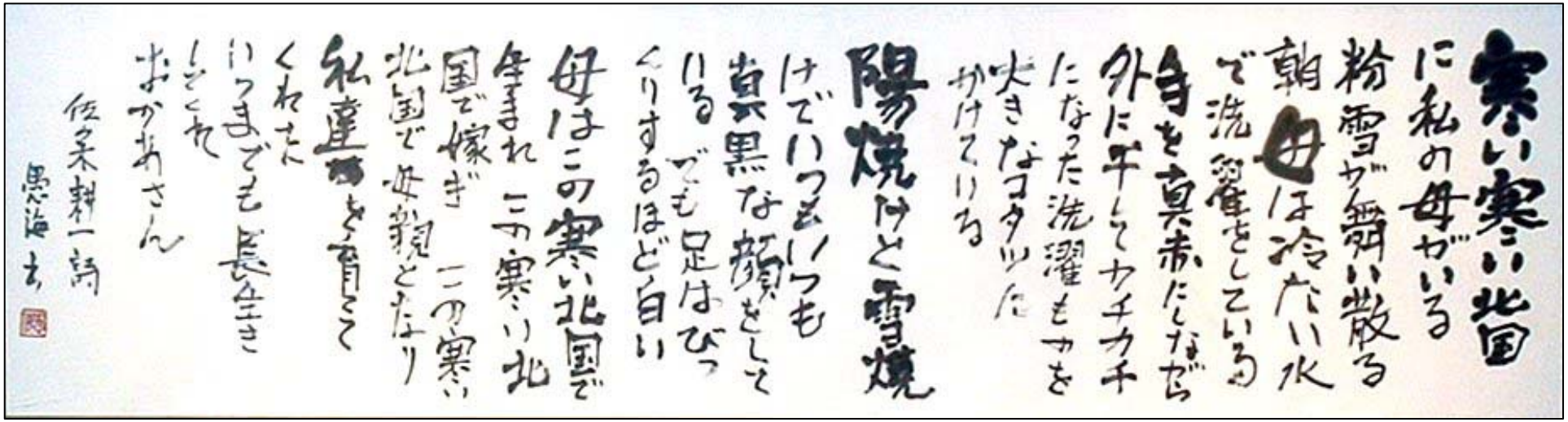
オオバコ

線路に耳をつけて近づいてくる
汽車の音を聞いたことがある
地面に張りついて生きている草よ
おまえにはこの大地に迫ってくる
足音が聞こえるのではないか
教えてくれ
それは人間にとって嬉しい知らせなのか
それとも・・・

「鈴の鳴る道」偕成社

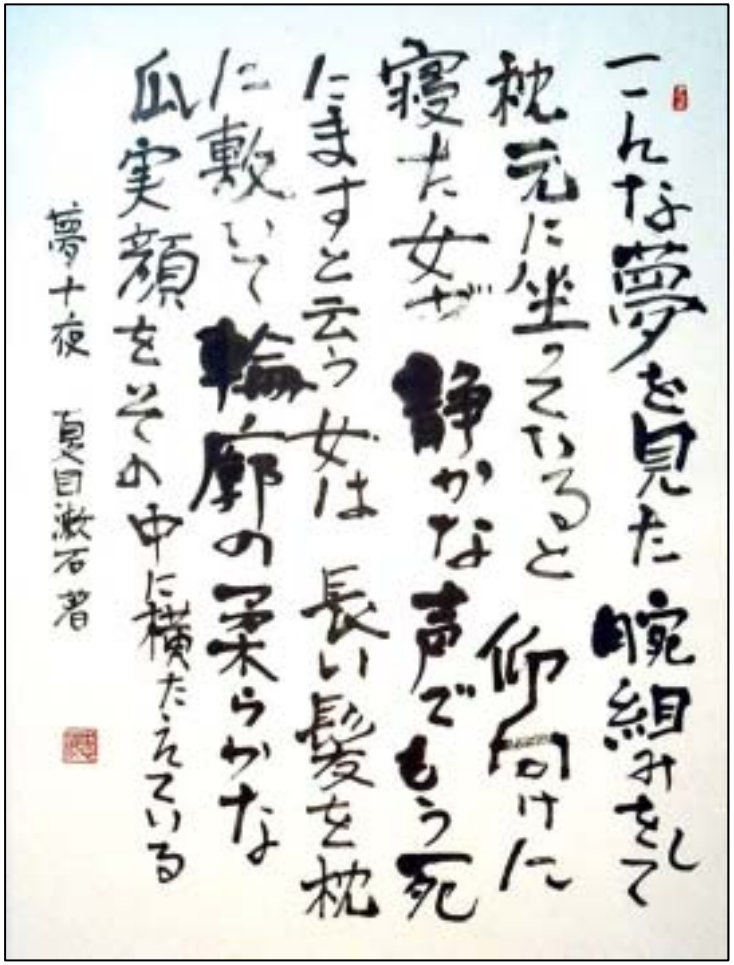
慈　愛　　（全紙）

三　省　　（全紙）

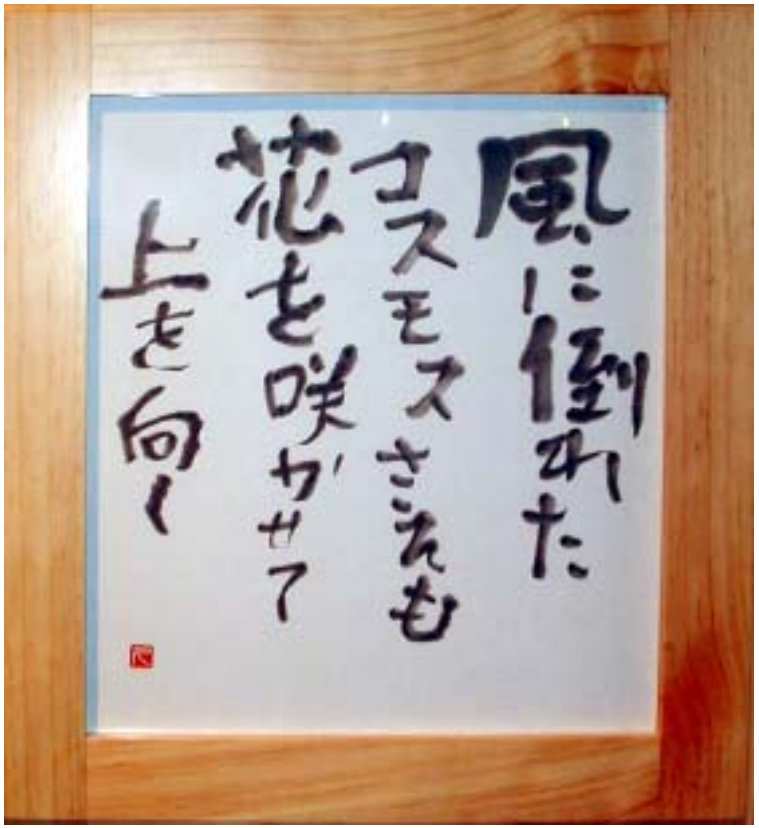


北国の母　　（半切）

この詩は、或る会社が「おかあさん」の詩を社員から募り詩集として発行された中の１篇。
普段活字に縁のないような職場、詩作に時間を割く間のない人たちからの貴重な寄稿のようです。
詩人ではない、全くの素人の詩です。単純にして切実、のっぴきならない心情を吐露した母への恋詩。
文の巧拙や表現方法の定石等を評価するよりも、なにか胸を突く一直線な思いがあふれているように思います。
（あなたの）「オリジナルですか？」と何人かの方から聞かれました。雪国育ちの私にはこういった光景は日常でしたから、元風景にとても近いです。懐かしくもあり、少々つらい思いもあります。
題材となる詩とそれを書く人。そして生み出された書作品を眺める観者は、何に感動するのか・・・。
詩の内容に涙する、書に感動する・・・（詩がイイの、書がイイの）今回もまた課題となります。



夢十夜　（全紙 1/3）



コスモス　（色紙）

阿含経　　（半切 1/4×4）

会　場　風　景

聖霊訓

人身受けがたし
正法また遇いがたし
今生の度脱せずんば
また、いつの日ぞ

牛や馬、豚や鶏、犬や猫の一生もあれば人の一生もある。
どれだけ苦労があると言っても、人間には反面楽しみも自由もある。
努力による報いもある。何よりも人間は考えることができる。
考える能力があるから精神的苦労も多い。
しかし、それだけ進歩がある。他の動物にはそれが欠如している。
彼らにも進歩がないことはない。しかし、遅々としている。
動物達の一生を思えば、人は自分の人生に不平不満を言える義理はない。
諸々の制限のある人生という枠の中で、人は可能性を見出し、希望の灯を点し、
能う限りの努力を為すべきである。
人生に絶望し、自暴自棄になって遂に自殺してしまう人も中にはあるが、
彼らは自分の外側にのみ幸福を期待し、
自分の中に幸福を見出す智慧を持たなかったのである。

（中略）

現世に救われていない心が、来世、急に救われるという道理はない。
今の心が大事である。
現世の心が死後の世界を決める。
この世はどうでもよい、来世さえよければよいという心は誤りである。
この世をしっかり生きることが、来世につながる。
現世の姿が来世の姿である。この世は魂の準備期であり、
この世を通じて来世に花が開く。
この展望にたって、この世の例え苦しいことがあっても、
よく耐え、希望をもって前進すべきである。

京都北山修道院院主　日向　美則著

「聖霊の書」　―天よりの慰めと励まし―

京都修道院出版局

人間はかたし 正法また遇がたし
今生の度脱せずんば
また いつの日ぞ

牛や馬 豚や鶏 犬や猫の一生もあれば
人の一生もある どれだけ苦労があると
言っても人間には反面楽しみも自由もある
努力による報いもある 何よりも人間は考
えることができる 考える能力があるから精神
的苦労も多いしかしそれだけ進歩がある
他の動物にはそれが欠如している 彼らにも進歩
がないことはないしかし遅々としている

動物の一生を思えば 人は自分の人生に不
平不満を言える義理はない 諸々の制限
のある人生という枠の中で人は可能性を見出し
希望の灯を点じ 能う限りの努力を為すべき
である 人生に絶望し自暴自棄になって
遂に自殺してしまう人も中にはあるが 彼らは自分
の外側にのみ幸福を期待し自分の中に幸
福を見出す智慧を持たなかったのである

現世に救われない心が来世に救われるという
道理はない 今の心が大事である 現世の心が死
後の世界を決める 「この世はどうでもよい来世
さえよければよいという心は誤りである
この世をしっかり生きることが来世につながる 現世の
姿が来世の姿である この世の魂の準備であり
この世を通じて来世に花が開く この展望に
立って この世の例え苦しいことがあっても よく耐え
希望をもって前進すべきである

日向美則著 聖霊の書より

聖霊訓　　（全紙）

あとがき

十四年ぶりにお会いできた方がいます。長らくご無沙汰していて、個展開催のご案内も差し上げなかったのですが、偶然にも通りの看板が眼に止まり、訪ねてくれました。

那珂市のKさんは、娘さんと卒業用の服を買って、その帰り道、なぜか行きと違う別の道を通ったそうです。ギャラリー案内の看板に「もしや・・・」と思って、階段をあがり扉越しに覗いたら「書道展」。別人と思い帰りかけたところを、私がその姿に気が付きお引き止めしました。（私は以前、油絵を画いていましたので、その印象しかなかったのです）

出逢いは偶然ですが、自分の知らないところで縁がつながっている・・とつくづく思います。拙い個展でも開いていたことでまたご縁があった。ありがたいことです。

※

会社の仕事や家庭のこと、さまざまなかかわりもある中で、「書」という分野で自分の人生を費やしています。「書」をとおして歴史的なことや思想、哲学、人生観などを得ることも多く、人間性や社会的地位が高める・・・という期待もあるのですが、「書」の世界は、もっと崇高な精神文化を秘めているように思います。書法や書風を学び腕を磨いて技術向上をはかり、段位を得て世間的な面でも認められることは大事でしょう。うまいとか下手とか（うまい方がよいのだが・・・）といった判断もありますが、生きている人間味（？）を持つことも大切なように思います。

※

「何のために書を書くのか」「書と自分とのかかわりは？」などといった自問と試行を繰り返しています。もしかしてこれも「書の楽しみ」の一つかもしれません。恥ずかしながら個展開催は、人との出会いと交流の場としても、書と自分のかかわりを認識させてくれる、貴重な機会となっています。

※

ご来場いただきました方々からご感想やメッセージをお聞かせいただき、また自由帳にお書き添えいただきました。感動、共鳴、応援、苦言、問題提起、ご叱責等はドキドキ、ハラハラですが、個展をやったことの最高のご褒美でもあります。

- **「思い」と「感動」が伝わって来てよかった。ただ線的な鍛えこみが足りないのは残念。線がものをいわなければ作品として成立しない（T様）**
- **自分の字というもの、自分というものをたいせつにしてゆきたい（Y様）**
- **自分の詩を作る、自筆で書く、そうするともっと深く人に伝わる（S様）**

ありがとうございました。

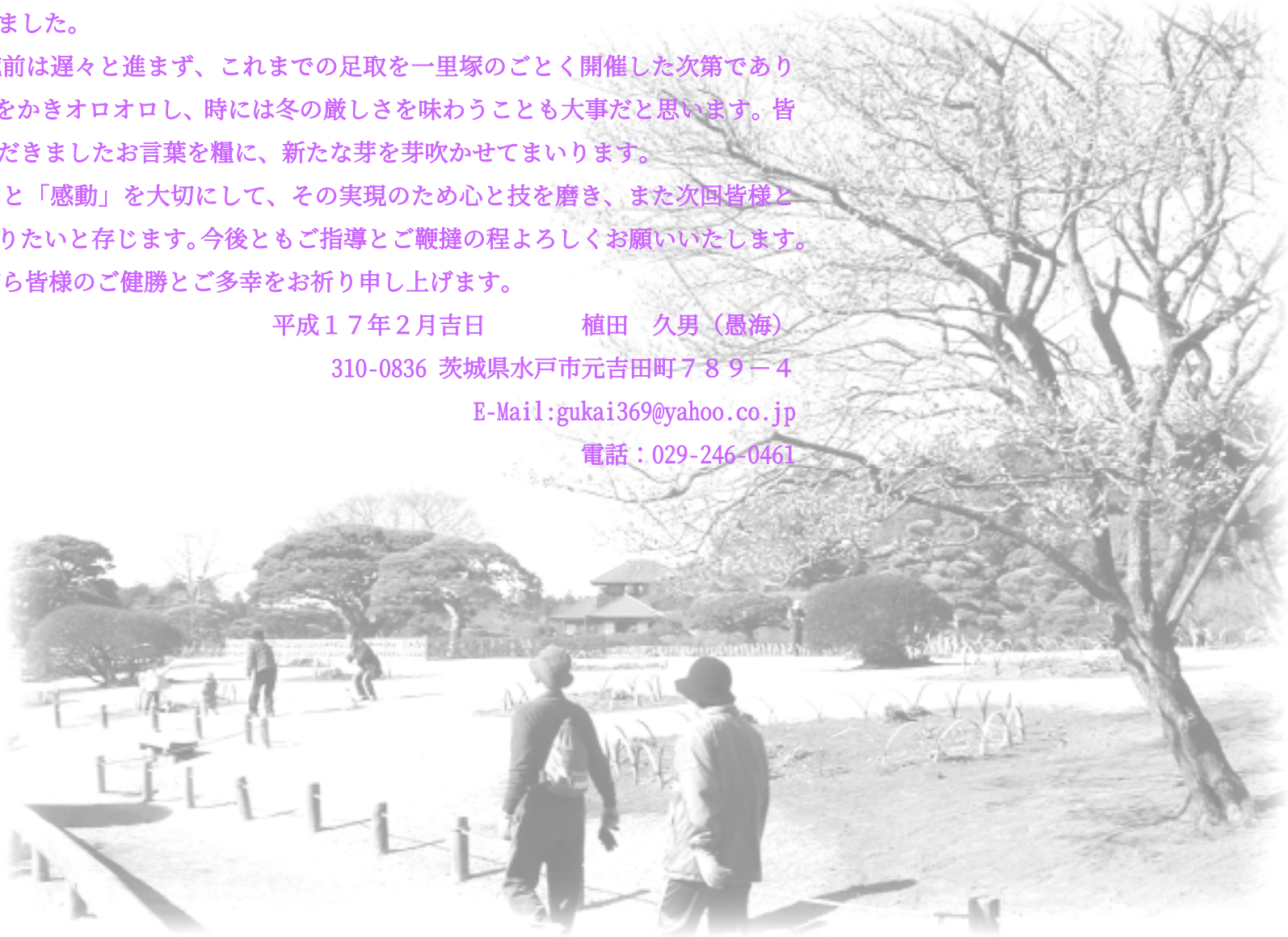
お礼の言葉

　この度の第二回書作展には、ご多忙中にもかかわらず、ご来場いただき誠にありがとうございました。

　書作の腕前は遅々と進まず、これまでの足取を一里塚のごとく開催した次第でありました。恥をかきオロオロし、時には冬の厳しさを味わうことも大事だと思います。皆様からいただきましたお言葉を糧に、新たな芽を芽吹かせてまいります。

　「思い」と「感動」を大切にして、その実現のため心と技を磨き、また次回皆様とお目のかかりたいと存じます。今後ともご指導とご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

　末筆ながら皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

平成１７年２月吉日　　植田　久男（愚海）

310-0836 茨城県水戸市元吉田町７８９－４
E-Mail:gukai369@yahoo.co.jp
電話：029-246-0461